

李光洙の日本語小説と同友会事件

——「萬爺の死」から「心相觸れてこそ」へ——

波 田 野 節 子

【要旨】本稿は、李光洙が同友会事件の前に書いた日本語小説「萬爺の死」（一九三六）と、事件後に書いた「心相觸れてこそ」（一九四〇）の二つの日本語小説を分析して、作品に内在する論理の変遷をさぐったものである。「萬爺の死」は日本の総合雑誌「改造」から依頼を受けて書いたもので、日本語で書いたこと自体は国家や民族とは関わりのない「尊重すべき趣味の問題」に属していた。だが、その五年前には朝鮮人読者のために朝鮮語で書くことを言明していた李光洙が、一流雑誌の依頼に応じて気軽に日本語で書いていることに、この時期の彼の精神的な弛緩と、その背後にある朝鮮社会の変質を見ることが出来る。

一九三七年におきた同友会事件で「転向」を余儀なくされた李光洙は、「内鮮一体」という言葉を逆手にとつて朝鮮人差別を解消させようと、日本人に向けて「内鮮一体」を訴える論説をいくつも書いた。また「内鮮一体」に関する「緑旗」の率直な論調に刺激を受け、同じ目的を小説によつて達成するために、京城帝大を舞台にした日本語小説「心相觸れてこそ」と、朝鮮語小説「그날의 사랑」を書いた。しかし戦時色の深まりとともに「内鮮一体」という言葉は「完全同化」の意味に変わつていき、李光洙もこの激流のなかに呑みこまれていった。

目次

はじめに

(2) 「心相觸れてこそ」

1. 「萬爺の死」

(3) 「그들의 사랑」

2. 「心相觸れてこそ」

(4) 「内鮮一体」から「完全同化」へ

(1) 同友会事件と「転向」

終わりに

はじめに

『無情』の作者であり、朝鮮近代文学の祖ともいわれる李光洙(一八九二—一九五〇?)は、日本語小説を書いたことでも知られている。それらはいわゆる「親日小説」とみなされて、韓国における研究はかならずしも活発ではなかったが、李京煥と金允植の先駆的な研究¹⁾や、布袋敏博の詳細な整理と分類によって研究の環境がととのったこともあり、最近では研究が活性化している²⁾。とはいえ、それらは作品分析が中心であって、作品が書かれた外的状況と作品の内的論理との結びつきの説明が十分とはいえない。とりわけ李光洙が日本語で文章を書きはじめた原因となった同友会事件との具体的なかかわりについては、資料の不足もあってほとんど研究されていない状態³⁾である⁴⁾。

こうした状況を念頭におき、本稿では、李光洙が同友会事件の前に書いた日本語小説「萬爺の死」と、後で書いた「心相觸れてこそ」をとりあげて、これらが書かれた当時の社会状況、李光洙が置かれていた立場、日本語

作品が掲載された雑誌の性格、そして、その時期に李光洙が朝鮮語で書いた他の小説を視野に入れて考察する⁵⁾。それによって二作品に内在する論理の違いを明らかにし、同友会事件が李光洙の日本語小説創作にあたえたインパクトについて考えてみたい。

布袋敏博は、李人植の短編「寡婦の夢」が『都新聞』に載った一九〇二年から一九四五年八月の「解放」までの時期に朝鮮文学に現われた日本語小説を整理し、日本語小説の発表数が急増する一九三九年以降を「日本語小説研究における「日帝末期」」と規定した。李光洙が多く日本語文を書きはじめたのもこの一九三九年からである。だが彼はそれ以前にも二つの日本語小説を書いている。その一つが彼の「処女作」だという事実が示すように、李光洙は作家としてのキャリアの初めから日本語と切り離せない関係をもっていた。そこでまず李光洙と日本語とのかかわりを俯瞰しておく。

李光洙が日本語と出会ったのはかぞえて一二歳、東学の伝令をしているときである⁶⁾。前年に父母を失って半放浪生活をしてきた李光洙にとって、日本語は生きるため、世に出るための手段であった。日本語を独学した彼はソウルに出て東学の学校で教師のまねごとをし、⁷⁾ここで選抜されて日本に留学する⁸⁾。半年で日本語をマスターして大成中学校に入学し、つぎに編入した明治学院普通学部で、彼は文学と出会った⁹⁾。李光洙の活字化された最初の小説は、中学卒業を前にして学校誌に投稿した「愛か」¹⁰⁾である。しかし「愛か」と同時に李光洙は、それまで近代的な情感を表現したことがない朝鮮語をもちいて、短編「無情」を書いた¹¹⁾。「愛か」に比べればつたなく硬直した印象を与えるこの短編は、彼が書いた最初の朝鮮語小説である。李光洙が朝鮮語を文学言語として開拓していくにあたり、日本語は大きな役割を果たした。彼は日本で見た外国映画や日本語テキストを朝鮮語に「翻訳」することで、朝鮮語の文学表現の幅を広げていったのである¹²⁾。一九一七年に発表された朝鮮近代長編の嚆矢「無情」の朝鮮語は、こうした文章鍛錬の成果であった。この鍛錬が彼の日本語の表現力をも高める結果をもたらした

たことは、『無情』連載が終了したすぐあとに『京城日報』に連載された紀行文「五道踏破旅行記」の見事な日本語が示している。李光洙はその後も日本語でいくつかの論説を書いた。しかし小説は、一九三六年八月に『改造』誌に発表した「萬爺の死」まで書いていない。

ここでは布袋の区分にしたがい、李光洙が一九三九年より前に書いた日本語小説を「前期日本語小説」、それ以降すなわち「日帝末期」に書いたものを「後期日本語小説」と呼ぶ。確認されている限りで、李光洙は前・後期あわせて十編の日本語小説を書いている。⁽¹⁵⁾

前期日本語小説	「愛か」	『白金学報』	一九〇九年一月
	「萬爺の死」	『改造』	一九三六年八月
後期日本語小説	「心相觸れてこそ」	『緑旗』	一九四〇年三月〜七月
	「加川校長」	『国民文学』	一九四三年一〇月
	「蠅」	『国民総力』	一九四三年一〇月
	「兵になれる」	『新太陽』	一九四三年一月
	「大東亜」	『緑旗』	一九四三年二月
	「四十年」	『国民文学』	一九四四年一月〜三月
	「元述の出征」	『新時代』	一九四四年六月
	「少女の告白」	『新太陽』	一九四四年一〇月

「萬爺の死」を発表したあと、李光洙は同友会事件のために「転向」を余儀なくされ、やがて「萬爺の死」と

はまったく違った論理によって「心相觸れてこそ」を書くことになる。本稿の第一章では「萬爺の死」が日本語で書かれたいきさつ、および当時の朝鮮半島の状況と李光洙の個人的状況を考察する。第二章では、同友会事件が引き起こした李光洙の「転向」と「心相觸れてこそ」に内在する論理を考察し、そのあと朝鮮語で書かれた「그들의 사랑 (彼らの愛)」(一九四一)とのかかわりを考える。なお一九四三年一〇月から集中して書かれる李光洙の後期日本語小説については別稿を準備中である。

1. 「萬爺の死」

一九三四年二月、李光洙はとつぜん敗血症で幼い息子を失った。⁽¹⁶⁾これがきっかけで精神的に動揺をきたした李光洙は、前年移籍したばかりの朝鮮日報社を退職し、郊外に家建てて引きこもった。⁽¹⁷⁾連載中だった「그 여자의 일생 (その女の一生)」はこのとき中断したが、李光洙は翌年には執筆を再開してこの長編を完成させ、つづいて『이차몬의 사 (異次頓の死)』(一九三五〜六年)、『애욕의 피안 (愛欲の彼岸)』(一九三六年)、『그의 자서전 (彼の自叙伝)』(一九三六〜七年)と、つぎつぎに長編を連載する一方で、雑誌にも短編や随筆を旺盛に執筆した。息子の死の衝撃を仏教への傾倒によって乗りこえた李光洙は、この時期、それなりに安定した状態にあった。彼の人生において中心的な位置にある同友会については、このころは平壤近郊にいる安昌浩の指示に従っていればよかった。新聞社を辞したあとの収入源は原稿料だけである。李光洙は作家活動によって家族の生活費、家の新築費、妻の産院開業資金(一九三六年に孝子町に土地を購入している)⁽¹⁸⁾を稼ぎだした。

「萬爺の死」を書くことになったきっかけは、家族の日本滞在である。一九三五年夏、産院開業の準備として許英肅が東京の日赤病院で研修した。妻と三人の子どもがいる「東京の家」で李光洙は一九三六年の正月を迎え、五月と六月を日本ですごした。⁽¹⁹⁾このとき彼は、以前からの知り合いである改造社の山本実彦社長の招きで、日本

文壇の作家たちといっしょに相撲見物をしている。おそらく、そんなときに原稿を依頼されたのだろう。帰国もない八月、彼は『改造』に日本語小説「萬爺の死」を発表した。

「あらずじ」「私」は三年前から北漢山のふもとの村に住んでいる。隣人の萬爺は、趣味もなくタバコも酒も嗜まないが「女なしには一日も暮らせない」という無口な石工で、これまで十人以上の女と暮らしては逃げられてきた。彼は三年前に手に入れた美しい女を引き留めるために、所有不動産を彼女と共有名義にしようとするが、親戚の猛反対に阻まれ、女に逃げられて発狂する。親戚たちによって柱に縛りつけられ、狂ったまま死んでいった萬爺のために、「私」は「次の世には好い処へ往けよ」と祈る。

萬爺の家系は男子に子供ができないことが、文中の処々で暗示されている。金允植も指摘しているように、この小説は、同じ年の一月に『三千里』に掲載された「成造記(感想)」という作品と切りはなせない関係にある。これは、息子を失くしたあと、彰義門(紫霞門)外の寺で夏を過ごした李光洙が、散策中に見つけた土地を気に入って、とうとうそこに家を建てる話である。後半部分では、建築にかかわったさまざまな人物の経歴と性格が創作まじりの独特の筆致で描写されているが、なかでも印象的なのが石工の朴先達である。朝鮮八道を歩きまわり、一時は砲兵隊で下士もしていたという朴先達は、先天的な性的欠陥のために妻を迎えても一日で逃げられてしまうという、要するに萬爺と同じ種類の人間なのである。「これが徹天之恨でさあ」と顔を癡癡させながら少年のような性器を見せた彼のことを、李光洙はこう書いている。

朴先達の一生は魯迅の阿鬼と似ているところがあり、人生の一つの標本としてじつに興味深い人間だっ

た。もし、彼の「今世」を決定した因である「前世」の業が何であるか、「今世」の彼の業と願がどのような「来世」をもたらすが分かれれば、もつと面白いことだろう。

「色気違い」の萬爺は、朴先達の「前世」か「来世」の姿である。朴先達という人間の輪廻に想像力を刺激された李光洙は、ちょうど依頼された『改造』にこの題材を使ったのだろう。それゆえ『改造』の依頼がなければ、彼はこの題材を朝鮮語で書いていた可能性が高い。日本に長期滞在して日本語への自信を回復したところに『成造』という一流誌から依頼を受け、李光洙は久しぶりに日本語で書いてみようという気になったと思われる。「日本文壇に進出してみるか」と日記に書いた二六年前の夢を思いだしたかもしれないし、日本文壇で活躍していた張赫宙へのひそかな対抗心もあったかもしれない。朝鮮よりはるかに高額な原稿料も魅力的だったことだろう。この時点で、彼の日本語創作は国家や民族の問題と関わってはいなかった。金允植の言葉を借りるなら、このとき「萬爺の死」を李光洙が日本語で書いたのは「尊重すべき趣味の問題」に属している。

土俗的な題材をあつかったこの作品を日本語で書くにあたり、李光洙はそれなりの戦略を練ったようである。まず、萬爺を主人公にした三人称小説でなく、「私」が語る一人称小説にしたことがそれである。これは前作の「成造記」の随筆形式を引き継いだ側面もあるが、都会から来た知識人である「私」の視点を導入することにより、日本人読者に対して過剰な違和感をあたえない効果を生んでいる。萬爺が親戚たちに縛られて死んでしまうという結末は残酷で野蛮だが、それも「人道上この儘黙して居る譯には往かない」と考えるような「私」が立ち会っていることで受け入れやすくなる。次に、「ボクギ鳥(晩春初夏にかけて啼く杜鵑属の一種)」などの括弧註や、「上衣」「袴」「擔車」などのルビによって郷土色を出しながらの意味伝達をはかり、また、村人の経済生活について説明したり、「職業紹介所」「電燈」「戸籍」「共同名義」などの現代的な語彙を随所に挿入することで、朝鮮

の農村がしつかりと現代社会に組み込まれていることを強調している。

このような配慮をもちこんだにもかかわらず、李光洙が四半世紀ぶりに書いた日本語小説は、ほとんど話題にならずに終わった。目次では「創作欄」に入れられず、外国人枠での小説という扱いをされていること、一流誌とは思われないほど校正がずさんであることに、『改造』編集部がこの小説に下した判断が垣間見られるようである。²⁸⁾

それにしても、五年前の李光洙は「私は自分の小説が朝鮮人以外の人に読まれるのを望まない」と書いていた。²⁹⁾ つい半年前のある座談会でも、日本文壇で活躍している張赫宙を批判して、朝鮮語で書くことでこの言語を豊かにすることが朝鮮作家の任務だと述べている。³⁰⁾ その彼が改造社の依頼に応じて抵抗なく日本語で創作をしていることに、彼の内部に生じていた精神的な弛緩を感じとることができる。この弛緩は、彼の精神的な支柱だった同友会の動向、そしてとりわけ一九三〇年代前半の社会状況とかわつていく。

三・一運動のあと、李光洙は亡命先の上海で、安昌浩の実力養成団体・興士団の団員となり、この運動を国内で行うことを決意して一九二二年に帰国した。翌年、齋藤実監督の内諾も得たうえで修養同盟会を立ち上げ、一九二六年には安昌浩からの指令で平壤の同友倶楽部と合流し、修養同友会と改称して機関誌『東光』を創刊した(翌年停刊)。一九二〇年代の末、修養同友会はより闘争的な団体をめざして会則を改正し、発展の支障になるとして「修養」の文字をはずした。李光洙はこの方針に反対だったが、多数決にしたがつていく。

一九三〇年代に入ると同友会は「東光」を再刊し、³¹⁾ 李光洙が編集局長をしている東亜日報のヴ・ナロード運動を通して農村運動を積極的にくりひろげた。しかし運動は総督府の干渉や弾圧を受け、総督府側が推進する農村政策に押されてしだいに沈滞していく。安昌浩が逮捕されて『東光』も終刊し、一九三五年ころの同友会活動は実質的に停滞状態におちいつていた。³²⁾ 一方、この間に満州事変が起きて社会の空気が大きく変わる。徐椿は、満

州事変のころから日本統治に対する人々の考え方が急速に変わってきたことを回想して、「日本は案外に強い、朝鮮の独立はとうていのぞみ得ないということがわかつて来た」と書いている。³³⁾ 万宝山事件は朝鮮民衆の扇動に成功し、総督府の朝鮮工業化政策は一定の成功をおさめて朝鮮人資本家層に満州進出への期待をいだかせた。³⁴⁾ 満州事変と満州国建国、国際連盟脱退という一連の事件を通して、朝鮮を絶対に独立させないという日本の決意を見せつけられた朝鮮の人々のあいだには、現状を認めたくさず違った生き方を模索すべきではないかという雰囲気広がっていった。

こうした状況が李光洙に、自分のやってきた民族運動の限界を感じさせたのだろう。息子の死とあいまって彼は仏教に傾倒していく。のちに彼は建てた家を売ることになるが、そのときに書いた随筆のなかで、この家を建てたころの自分は「民族主義運動といふものが如何に皮相的なものであるかといふことが分かってきてゐた」と書いている。³⁵⁾ 「萬爺の死」を書いたころの李光洙はそんな心境にあった。そして、その一年後に同友会事件が起きるのである。

2. 「心相觸れてこそ」

(1) 同友会事件と「転向」³⁶⁾

一九三七年六月、とつぜん李光洙と安昌浩ら同友会会員の逮捕がはじまった。日中戦争勃発のひと月前だった。取調が始まってすぐ、これは新民会事件と同じく同友会弾圧のための捏造であることに気づいたと、李光洙は回想している。³⁷⁾ 取調は過酷で、会員二人が死亡し、一人が廃人同様になった。李光洙と安昌浩は年末に病気で保釈されて入院し、安昌浩は翌年三月に亡くなる。上海亡命時代からつねに安昌浩を師と仰ぎ、彼の存在を心のよりどころに活動してきた李光洙にとって、これは計りしれぬほど大きな打撃だった。そのうえ安昌浩の死により、

彼は同友会を代表する立場に立たされた。会の趣旨にそつて誠実な社会人・家庭人として生きてきた中産階級の会員たちは、いまや職場を奪われて生活が破壊される危機に瀕していた。李光洙は彼らの運命も担うことになったのである。

安昌浩の死後、李光洙は病床で「無明」と『사랑(愛)』を書く。この世の最底辺である牢獄でも欲にとらわれて生きる救いなき人々の姿を淡々とした筆致で描いた一人称小説「無明」は、仏教的な諦念にあふれている。すでに民族主義運動の限界を痛感していた李光洙はますますその思いを強め、仏教に救いを求める心を増幅させていったと見られる。一方、『사랑』の主人公は異常ともいえる熱情で至高の愛を追求する女性である。敬慕する既婚男性への愛を貫くために、彼女は自分に横恋慕する他の男と結婚する。もし横恋慕する男を日本と解釈するならば、彼女の異常なまでの自己犠牲が結果的に男と男の母まで死に至らしめる展開には、ある種の不気味さを感じられる。『사랑(上)』は一〇月に博文館の『現代傑作長編小説全集』の一冊として単行本で刊行され、これで李光洙は入院費を捻出したという。⁽³⁸⁾

この一九三八年には多くの朝鮮人が「転向」した。五月に起きた興業倶楽部事件では関係者が「思想転向声明書」を出して九月に不起訴処分となり、⁽³⁹⁾六月には同友会の会員で起訴猶予が決まった金與済や田榮澤ら一七名が「転向声明」を出して大東民友会に入会した。⁽⁴⁰⁾八月に李光洙ら四一名の裁判がはじまり、その三か月後に彼らも「転向」を表明する。起訴された会員のうち未決囚と欠席者をのぞく二八名は、あらかじめ許可を受けたうえで一一月三日の明治節に「思想転向会議」を開き、裁判所に「申合」を提出した。この日午前九時、一同は許英爾産院のある孝子町の李光洙宅に集まって、皇居遙拜、国家奏楽(レコード)、黙祷のあと朝鮮神宮に行つて参拝し、帰宅後に全員で「申合」に署名捺印をして、万歳三唱で閉会した。⁽⁴¹⁾

裁判は三年間つづくことになる。第一審では全員が無罪判決を得るが検事側が即日抗告し、第二審では全員有罪判決で被告側が上告、最終審で無罪判決を勝ちとつたのは「大東亜戦争」が勃発するひと月前の一九四一年一月だった。この間、李光洙はつねに裁判の動向を念頭において行動することを余儀なくされた。裁判所にこの「申合」を提出したことも、その一つである。少し長いが、「申合」の全文を引用する。ただし、カタカナ文をひらがな文に直して現代仮名遣にし、旧漢字を新漢字に改めてある。

申 合

吾等は、併合以来の日本帝国の朝鮮統治を、英国の印度に対するが如き、仏国の安南に対するが如き、単なる所謂植民政策と解して来た。そして、朝鮮民族は一殖民地の土人として永遠の奴隷たるの運命に置かれたものと嘆いてきた。明治大帝の一視同仁の御言葉は實際に於ては永久に実現されぬものと思つたのである。是に於て吾等は独立思想を抱き、朝鮮民族を日本帝国の羈絆より解放することが吾等の義務と信じて来たのである。

併し吾等は過去一年有半深き反省の結果、朝鮮民族の運命に対する再認識、従来吾等が抱懐せる思想に対する再検討によりて、日本帝国の朝鮮統治の真意に対する正しき理解に達することが出来た。吾等をこの喜ばしき結論に導いた最も有力なる要因をなすものは、支那事変によりて明らかにされた日本の国家的理想と、南総督の幾つかの施政や意思表示とである。

吾等は支那事変に於て、⁽⁴²⁾日本帝国の国家的理想が西洋の帝国主義国家群のそれとは甚だ懸隔のあることを認めた。日本は八紘一字の理想を強く認識して、先ずはアジア諸民族をして欧米帝国主義と共産主義との桎梏より脱せしめ、東洋本来の精神文化の上に共存共栄の新世界を建設することが日本帝国の国家的理想にし

て目的であることを、吾等は理解すると同時に、朝鮮民族も、決して従属者にも、追隨者にもあらずして、共に日本国民の重要な構成分子として、此の偉業を分担し、又それより来る幸福と栄誉を享受する者であることを、国家より許され且要求されたものと、吾等は理解することが出来たのである。已に教育の平等は実現された。近き将来に於いて、義務教育も実施され、兵役の義務を朝鮮民族に及ぼすことも暗示されて居る。一言以て之を蔽えば、日本帝国は朝鮮民族をば、植民地の被統治者としてではなく、真に帝国の臣民として之を受け入れ、そして之に信頼せんとする真意のあることを吾等は理解し、且つ信ずることができたのである。

斯くて、吾等は従来の吾等の誤解に基ける、祖国に対して誠に申し訳なかつた思想と感情とを清算して、新しき希望と歡喜と熱情とを以て左の如く決する。

一、吾等は至誠以て天皇に忠義を致そう。
二、吾等は日本国民たるの信念と矜持とを以て帝国の理想実現の爲め、精神的に並に物質的に全力を尽くそう。

三、支那事変は我が日本帝国の国家的理想実現の基礎に關することなるをしかと把握し、作戦及び長期建設の爲めのあらゆる国策の遂行に最善の努力をなそう。

ここに明治の佳節を下し、吾等下記者は熟慮の上、申合わせをなすものである。

昭和十三年十一月三日 元同友会、員一同

自分たちは、明治天皇の「一視同仁」という言葉を信じず、日本が朝鮮を植民地の奴隷のように支配すると思

いこんで民族独立思想を抱いていた。しかし、日中戦争で日本が示した東洋共栄の国家的理想、および南總督の「幾つかの施政」と「意思表示」によって誤解は解け、朝鮮人も帝国の臣民として平等な扱いを受けられると信じる事ができた。それゆえ今後は日本国民として生きることを決意した、という内容である。要するに前は日本を「信じなかつた」のが今は「信じる」に代わつたということである。きつかけになつた「南總督の幾つかの施政」とはこの年二月に始まつた陸軍志願兵制度と三月の朝鮮教育令改正を、そして「意思表示」とは「内鮮一体」をさすと思われる。

このあと李光洙は「申合」を誠実に実行して「内鮮一体」の推進に協力するようになる。⁽⁴⁴⁾翌一二月の一四日、彼は京城府民会館講堂で開かれた「時局有志円卓會議」に出席し、「朝鮮人という固執をすてて日本人になり、日本精神をもつことを決心しました」と述べた。新聞報道等によって李光洙の「転向」を知つた人々は、このとき彼の口から直接その事実を確認したことになる。「時代はどうあれ、誰がどう酷評したといつてもあくまで、民族主義を以て通して行く作家」として大衆から特別の尊敬を受けていた李光洙の「転向」は、多くの人々に驚きを与えたと思われる。彼の身の処し方を見て時勢を受け入れた人々も少なくなつたのではないか。⁽⁴⁷⁾

壇上の李光洙は、心を訓練することで「国民的感情」をもつて日章旗を掲揚し神社を参拝ができるようになった体験を語り、「内鮮一体の道は、このような国民的感情を徹底的に培養するために、ひたすら日常行動を訓練することにあると考えます」と述べた。⁽⁴⁸⁾この言葉からは、「日常行動の訓練」によって自らを「改造」すると同時に、他の人々にも「内鮮一体」を啓蒙しようという積極性が感じられる。兪鎮午は李光洙を回想して、「彼は何にでも熱中する性格だつた。内鮮一体を主張したのも彼のこんな性格から来たものと思われ」と書いている。兪鎮午も李光洙の積極性を感じたのだらう。

では李光洙は「内鮮一体」をどのようなものと考えていたのか。このとき玄永燮が「内鮮一体」のために言語

風俗まで融合一体化すべきだと発言したのに対して、李光洙は、「朝鮮の文化、言語などを最後まで保存しながらでも、朝鮮人は真心から日本を愛する日本国民になり、天皇陛下を真心から自分の君主として敬拝する心は持てると思います。またそれこそ内鮮一体の真正の道だと私は信じています」と述べている。この言葉が示すように、彼は、天皇と日章旗を敬愛しながらでも朝鮮の文化と言葉を保つことができると考えていた。また、こうした考えがこの時期には主流であり、玄永燮のような主張はむしろ極論とみなされていたのである。この数か月前に玄永燮が南総督に朝鮮語使用の全廃を進言したとき、南はこれを拒否して国語普及運動は朝鮮語廃止運動ではないと明言した。また「内鮮一体論の基本理念」の著者である津田剛は、このころ書いた論説のなかで、「内鮮一体」は決して盲目的内地化を意味するものではないとして、「朝鮮服は純乎たる日本服であるのである。日本人のほかに世界のどこに朝鮮服を着た国民が存在するであろうか」と断言している。

宮田節子は、「内鮮一体」という語は、状況変化にもなつて内容を融通無礙に変化させる「アメーバーのごとき不定形」なものだったと表現している。日中戦争から大東亜戦争にかけて、南は民族差別解消への切り札のごとくこの言葉を連発したが、彼自身は「内鮮一体」という言葉のあやうさをよく認識していた。朝鮮総督府がこの年九月にひらいた時局対策調査会の「内鮮一体ノ強化ニ関する件」に関する審議で明らかになったことは、内鮮一体を阻むものはむしろ既得権に固執している日本人であるという、日本人に対する朝鮮人側の根強い不信、そして朝鮮人差別、官吏の待遇、義務教育、兵役、参政権、内地渡航の規制や、満州と内地との政策的一貫性の不在など、「容易に解決しえざる問題群」が山積しているという事実だった。審議の内容を分析した三ツ井崇は、「内鮮一体」を唱えた瞬間、袋小路に入り込む予感がこの時点で明るみになったというのが、この調査会の性格ではなかったであろうか」と書いている。手のつけようのないほどの問題群に蓋をしたまま、「平等」をにかけて「皇民化」への内発性を朝鮮人から引き出そうとしたのが、「内鮮一体」というスローガンだった。

李光洙は「内鮮一体」のこうした曖昧性を承知しながら、それに賭けたのだと思う。自分が生きていくあいだ、いや、そのあとも日本の統治がつづくと思つた彼は、それを受け入れたうえで積極性に転じたのである。早稲田大学時代、李光洙は日本の雑誌『洪水以後』に「朝鮮人教育に対する要求」という論説を投稿し、「同化」の論理を逆手にとって、同じ「天皇の赤子」である朝鮮人にも日本人と同じ教育制度と同じ教育をよこせと要求したことがある。今回も李光洙は「内鮮一体」の論理を逆手にとって「差別からの脱出」という実利を取ろうとしたのだらう。大学生だった李光洙は、レトリックとはいえあまりに卑屈な文章を書いたことに自己嫌悪し、翌月同じ雑誌に日本への罵詈雑言を書きつらねて匿名で投稿した。しかし、今度はそんなことはできない。彼は自己を完璧に「改造」するために「日常行動の訓練」をつづけることになる。

このあと李光洙は日本語の文章を発表しはじめる。翌一九四〇年、香山光郎と創氏改名し、朝鮮芸術賞を受賞して日本で四冊の翻訳本を刊行する一方で、彼は「内鮮一体」を称揚するいくつもの日本語文を発表した。九月に国民精神総動員朝鮮連盟の機関誌『総動員』に「内鮮青年に寄す」、一〇月に『京城日報』に「同胞に寄す」、翌年一月に同紙に「重大なる決心―朝鮮の知識人に告ぐ」、その翌月に在日朝鮮人の皇民化教育機関である中央協和会の『協和事業』に「内鮮一体随想録」を書いている。

日本人と朝鮮人の双方に呼びかけているように見えるそれらの文章は、むしろ日本人に向けられたものだとみなすことができる。一九三六年の統計によれば朝鮮人二一五〇万人のうち「普通会話に差支なきもの」の数は一〇五万人で全体の約五パーセントだが、論説や小説まで読むような人間の数はこれよりずっと少なかったはずである。一九四〇年の金史良の小説『天馬』の登場人物は、「朝鮮人の八割が文盲であり、しかも字を解する者の九〇パーセントが朝鮮文字しか読めない」と語っている。要するに日本語で小説を読める者は二パーセント、つまり四〇万人というのが、当時の作家の体感であった。一方、当時の在朝日本人の数は六五万人で、このうち新

間の論説を読む人間を仮に三分の二とすれば数字的にはあまり差はない。しかし『京城日報』のような日本人中心の媒体に掲載されている点から見ても、李光洙の日本語文はやはり日本人を対象としていたと見るべきだろう。これは、内容を読むとさらに明らかになる。「内鮮青年に寄す」では「内地青年」と「半島青年」のそれぞれに呼びかけているものの、とくに「内地青年」に対する呼びかけの方に、朝鮮人の友人と心を通いあわせてほしいという李光洙の主張が強くこめられている。「内鮮一体随想録」は、最初こそ「天皇の臣民になろう」という朝鮮人への呼びかけで始まるが、最後は朝鮮人を同胞として愛してほしいという日本人に向けての切々たる訴えになっている。実際、日本にいる朝鮮労働者がこのような日本語論説を読めるわけがない。これを読んだのは協和会事業に関わる日本人たちだったはずである。「重大なる決心―朝鮮の知識人に告ぐ」は、タイトルを見ると朝鮮人に対するメッセージのようだが、購読者の多くが在朝日本人である『京城日報』という媒体に発表されることで意味が変容する。日本人は決して「欺かない民族」であるから「赤子の母にすがすがしく」日本人を信ぜよ、という朝鮮人知識人への呼びかけは、これを読んでいる日本人に対しての「欺かない民族であれ」というメッセージ性をおびることになるのである。

同じ『京城日報』に一九四〇年一月一日から九日間わたって連載された「同胞に寄す」の「同胞」は、明白に日本人である。李光洙は「同胞」たる「君」に対して、これまで「僕」が「日本臣民」でなかったことを懺悔しながら、なぜ「臣民」になれなかったかの理由を述べている。それらは「申合」の内容とまったく同じであり、李光洙が自分の過去の姿を告白し、これからは「内鮮一体」のために努力するという決意を述べていることがわかる。この中で李光洙は「内鮮一体」が実現する具体的なイメージを、「陛下の陸海軍の中に朝鮮人兵士や士官が四分の一も乃至三分の一も加は」って、「僕が君と同じ(中略)全然無差別の水準」となり、政治参与の問題も解決して「国会議員の約四分乃至三分の一は朝鮮人」で「朝鮮出身の大臣や大将を見る日」と表わしている。そして「不幸にして、君が、僕の云つていることを白日の夢と思ふとすれば、すべては滅茶滅茶だ」と、「内鮮一体」が日本人の単なるスローガンであってはならないことを警告している。一九四一年一月、李光洙はこれらの日本語文をまとめて、博文館から「同胞に寄す」を刊行した。

(2) 「心相觸れてこそ」

一九四〇年三月から在朝日本人の雑誌『緑旗』に連載された日本語小説「心相觸れてこそ」は、「同胞に寄す」と同じ流れのなかで書かれている。四年前の「萬爺の死」がたまたま日本語で書かれたものであったとすれば、「心相觸れてこそ」は最初から朝鮮に住む日本人に「内鮮一体」を訴える目的をもって日本語で書かれたものである。

「あらずじ」金忠植は京城帝国大学の医学部に勤める外科医、東武雄は二年下の法文学部学生である。忠植が北岳山で遭難した武雄を助けたことから、忠植と石蘭、武雄と文江の二組の兄妹のあいだにいわゆる「内鮮恋愛」が生まれる。やがて武雄は出征して負傷し、従軍看護婦になった石蘭と野戦病院で再会する。失明した武雄は単独での宣撫工作を決意し、通訳として同行することを申し出た石蘭と仮祝言をあげる。敵陣に入つて敵将に会った武雄は熱弁をふるうが、そのあと牢獄に閉じ込められる。二人が死を覚悟して手をとりあうところで第五回が終わり、「つづく」とされているにもかかわらず連載はこの回でとぎれている。

陸軍大佐である武雄の父と独立運動の前歴をもつ忠植の父を巻きこみ、「内地人」と「半島人」のあいだに生まれる心の触れ合いを描くことで日本人に「内鮮一体」を呼びかけるのが、この小説の目的である。このなかで

まず注目されるのは、忠植の父の金永準である。独立運動をおこなって満州事変直後に逮捕され、昨年假釈放された「不逞鮮人」である彼は、じつは日本の強さをよく知っており、朝鮮人は日本臣民として生きていく運命にあることを認めている。その彼を日本統治反対に駆りたてているのは、これまでやってきた民族独立への「義理」と、朝鮮人が永久に植民地の土着民として賤しまれることへの「悲憤」なのである。このような彼の姿は、朝鮮人が「一植民地の土人」として統治されると思ひこみ、一視同仁の言葉を信じずに独立思想を抱いてきたという李光洙の「申合」を想起させる。金永準は、日本が朝鮮に「まづ平等」をくれさえすれば朝鮮民衆のために独立主義を棄ててもよいと考えている。息子たちの姿はその永準の心を動かし、ついに彼は忠植の軍志願を許す。永準は「信じなかった」日本を「信じる」ことにしたのである。これは「申合」と同じ心の動きである。「申合」の内容を誠実に実行している李光洙が、自らの姿、あるいは自らがそうであるべき姿をこの人物に形象化させていることがわかる。

次に注目されるのは、経済的な面をのぞけば朝鮮人が日本人よりすべての面で優位にあるという、現実とは真逆の設定である。忠植は医師で、武雄の先輩であり、命の恩人である。石蘭は武雄兄妹より「流暢な、本物の東京弁」を話すうえ中国語が堪能で、最後になると武雄は石蘭なしでは歩くことすらできない。これは彼らを精神的に水平な位置におくための転倒装置ではなかったかと思われる。この設定は、日本人と朝鮮人が平等の感覚をもつて恋愛するために、これだけのハンディが必要であったという当時の朝鮮の現実を示すと同時に、日本は朝鮮なしには戦争を遂行できないという李光洙のひそかな考えを投影したものと受け取ることができる。武雄と仮祝言をあげた石蘭が日本と一つになった朝鮮を体現していると解釈するなら、この小説の終わり方は暗示的である。⁽⁶⁵⁾失明した武雄が家に送り返され、石蘭が東家に入ってかたくなな義母の心を開かせればハッピーエンドになるのに、李光洙はそうしなかった。血気にはやる武雄の単身の宣撫工作という無謀な行動は、石蘭の協力を前

提にしたものである。中国語もできない盲目の日本兵が非力な朝鮮人の新妻を道案内にして敵地に入りこみ、牢獄で死を覚悟して手を取り合うという「内鮮恋愛」の末路は悲惨であり、「ササ」の場合と同じく、憑かれたような不気味さを感じさせる。この小説がここで中断した理由は不明だが、説得工作が失敗すれば待っているのは処刑であり、たとえ成功しても、その後の展開は進行中の戦況との整合が難しく、荒唐無稽になる危険性をはらんでいる。むしろ李光洙は、この牢獄の場面で小説を終わらせることを望んだのではないだろうか。⁽⁶⁶⁾

第三に、もっとも注目すべき点として、「心相觸れてこそ」の執筆は、発表媒体である「緑旗」および、その人脈を形成していた京城帝国大学と深いかわりを持っていることが挙げられる。「緑旗」を刊行していた緑旗連盟は、一九二〇年代に京城帝大予科の化学担任だった津田栄⁽⁶⁷⁾が生徒を集めて作った日蓮思想の研究サークルが発展してきたもので、一九三八年には二千名の会員を擁する社会教化団体になっていた。緑色は「人の心に緑の心を植える」という趣旨だという。⁽⁶⁸⁾会の活動は、津田栄の実弟である津田剛⁽⁶⁹⁾と森田芳夫が一九三二年に京城帝大を卒業して専従研究員になってから本格化し、翌年、既存のいくつかの団体を統合して緑旗連盟が発足した。「緑旗」は一九三六年に創刊され、翌春には津田たちと同期の玄永燮が緑旗連盟の研究員になって筆をふるった。⁽⁷⁰⁾彼は「内鮮一体の精神は、朝鮮人が果たすべき義務であると同時に、内地人に対しても当為となる。朝鮮を植民地視するが如きは絶対に許され難いことである」として「内鮮一体」が差別の否定であることを強調し、「緑旗」はこうした論調を尊重しながら「内鮮一体」問題に取り組んだ。もちろん職員に民族による待遇差はなかった。津田剛はつきつきと論説を「緑旗」に発表して、一九三九年末に「内鮮一体論の基本理念」を上梓する。⁽⁷²⁾この年の「緑旗」誌上では、日本人と朝鮮人の双方から「内鮮一体」についての活発な議論が行なわれた。⁽⁷³⁾

八月号のアンケート企画「内鮮一体は先ず何から始むべきか」には、教育者や経済人からさまざまな意見が寄せられている。なかでも「若い人がその気になる」ことだと答えた京城帝大教授の尾高朝雄は、そのあと「緑旗」

に「朝鮮に学ぶ学生諸君へ」という文章を寄せ、弟子たちのあいだに存在する「内鮮関係の蟠り」を解くために、双方の学生に「内鮮友情」を呼びかけた。京城帝大の関係者で運営されている雑誌だけに、京城帝大における「内鮮一体」が読者の大きな関心事であったことがわかる。ある京城帝大学生は、朝鮮人学生には教室のなかだけでも日本語を使つてほしい、そのかわり内地人学生は彼らの発音や誤りを笑つてはいけない、相手を理解しようとする思いやりの心が大切だと、「心を触れ合う」ことを訴えている。

李光洙は京城帝大キャンパスにおける学生たちの反目を気にかけており、『緑旗』の記事も読んでいたと思われる。「心相觸れてこそ」では、京城帝大の朝鮮人学生と日本人学生のあいだにある反目が背景になっている。忠植の家で意識を回復した武雄は、石蘭の話から自分を助けてくれた忠植が京城帝大の先輩であると知つて、自分の学校の朝鮮人学生のことを考える。武雄はこれまで朝鮮人学生とほとんど交際がなく、教室で朝鮮人学生が朝鮮語を話しているのを見ると「殴つてやりたいほど」不快を感じるような、要するに典型的な日本人学生だった。その武雄が石蘭を愛することで変わり、「朝鮮人も日本人も、結局違ふところはない」と言つて金永準を驚かす。そして忠植に、「僕達日本人は、朝鮮同胞に対する愛と敬が足りなかつた」と謝るのである。ここには京城帝大の若い「内鮮」学生たちに心を通わせてほしいという李光洙の願いが現われている。

李光洙にとつて京城帝大の学生たちは後輩のようなものだっただけに、この思いはなお切実だったのだろう。李光洙は京城帝大に法文学部ができた一九二六年に英文科の選科生第一回生として入学している。(26) 歙鎮午と机を並べて学びはじめたが、そのあと大病がつづいて休学を繰り返かえし、結局一九三〇年に除籍になった。短い間とはいえ自分が学んだキャンパスである。後輩たちのことは気にかかつたことだろう。子息の李榮根氏の回想記によれば、一九三〇年代後半、紫霞門郊外の家にはよく帝大予科の学生たちが遊びに来ていたという。また、このころ金龍済が『緑旗』に「戦える文化理念」という論説を書いて、「内鮮一体」の理念を文芸作品に形象化

せよと訴えたことにも刺激されたかもしれない。(28) 日本人読者たちに対して「内鮮一体」を訴える「心相觸れてこそ」を書いた李光洙は、そのあと今度は朝鮮人読者のために、京城帝大を直接の舞台にした「그들의 사랑」(彼らの愛)を執筆する。

(3) 「그들의 사랑」

「그들의 사랑」は一九四一年一月の『新時代』創刊号から連載が始まり、三回で中断した。第一回の作者名は「李光洙」だが、二月の創氏改名を受けて、二回目からは「香山光郎」に代わっている。全体は朝鮮語で書かれ、登場人物が日本語で話している部分のみ日本語で書かれていて、括弧で朝鮮語訳がついている。

「あらずじ」光州学生事件がおきて朝鮮人学生たちの心が不穏だった一九二〇年代の末、京城帝大予科生の西本忠一は、化学の教員で日蓮の信奉者である石本正雄(明らかに津田栄がモデルである)の「朝鮮人学生たちが不穏な考えを捨てないのは、朝鮮に来ていた我々内地人の責任だ」という考えに共鳴し、学費に窮している友人の李元求を弟の家庭教師として家に置くことを父に頼みこむ。西本家に入った李元求は日本家庭の清潔と礼節に感銘を受け、一方、西本家の人々は李元求の人間性を知ることと朝鮮人に対する認識を変えていく。やがて元求は忠一の妹の道子を愛するようになる。だが元求は仲間たちから疑いの目を向けられて、吊し上げられる。「叛逆者」「スパイ」というヤジが飛ぶなかで、元求は日本を祖国だと考えていることを告白するが、光州学生運動を「愚かな群集心理」だと言つたことから仲間たちの怒りが爆発し、元求を制裁しようとする学生とそれを止めようとする学生との乱闘が始まる。

「그들의 사랑」は「心相觸れてこそ」と多くの共通点をもっている。第一に、ともに京城帝大における学生たちの「反目を背景にして」、「内鮮一体」を呼びかける目的をもって書かれている。第二に、真の「内鮮一体」のためには相手の家庭を知ることの重要性が強調されている。武雄は負傷したために朝鮮の家庭を知り、元求は忠一の厚意で弟の住込み個人教師となって日本の家庭を知った。李光洙は「同胞に寄す」でも「内鮮一体随想録」でも、日本人に対して朝鮮人を家庭に迎えてくれるよう訴えており、それが心を通わせる第一歩だと考えていた。それをこのような形で小説化させたのである。

第三に、金永準の場合と同じく、登場人物の心を、自らがそうであるべきだと考えている軌道にそって動かし、西本家で暮らすうちに日本人が朝鮮人を蔑視しているという先入観から自由になった元求は、自分たち朝鮮人にある短所に気づいて「嘘を言わない」訓練をはじめ、そのとき葛藤が生まれる。

そのころ朝鮮の学生たちは、外側は日本臣民として行動していた。それでいて内心は、
「自分は日本臣民ではない」

こう考え、またほかの朝鮮人に向かってでもこう言っていた。
元求もこれをあたりまえだと思っていた。

しかし、これは明らかに嘘だった。嘘のなかでも大きな嘘だった。
大きな嘘をつきながらもそれが嘘という罪である事さえ気づかないのは、最大の罪だった。⁽²⁹⁾

自分は日本臣民だと口にしたなら、内心でもそう思わなくては「嘘」になる。そう考えた元求は外側の自分と内側の自分を一致させ、仲間たちの前でも「日本が祖国だ」と堂々と言明する。昔から「嘘」を言うなと繰り返かえ

してきた李光洙は「内鮮一体」についてもそれを実行すべきだと信じ、その態度を元求に取らせたのである。

最後の共通点は、連載の中断に関するものである。先述したように「心相觸れてこそ」の場合は中断かどうか曖昧なところがあつたが、「그들의 사랑」は明らかなか中断である。第三回の本文のあとに「次号をお楽しみに」という文句があるのに、翌月号は目次にタイトルだけあつて該当頁が脱落しており、その翌月の編集後記に「先月からやむをえず中断しました」とある。ある研究者は、「内鮮一体」をめざす主人公を攻撃する朝鮮人学生たちの姿が、作者の迷惑をこえて朝鮮人読者の共感を呼んだ可能性を指摘しているが、あまりにも現実に即した描写が検閲にひつかかつた可能性は高い。すでに第二回でも、最後の部分は削除されていた。忠一が元求に「天皇にすべてを捧げ奉る愛国心」があるかどうかを聞いたただ緊張した場面が元求の答えがないまま途切れてしまい、次号の冒頭部分は前回の内容と整合していない。⁽³⁰⁾ 日本語よりも朝鮮語で書くときの方が、検閲が厳しかったことが推測される。

ところで、学生たちが大勢で一人を吊り上げるといふアイデアを、李光洙は玄永燮の文章から得たようである。玄永燮は『朝鮮人の進むべき道』のなかで、予科時代に日本人の下宿に泊まって朝鮮人生徒と付き合ってきたSという学生が、「極端に親日的」だという理由でみんなから袋叩きにされそうになった話を回想している。⁽³¹⁾ 多数が個人を圧迫することに耐えられなかった玄永燮は、そのときSの味方をしたという。

(4) 「内鮮一体」から「完全同化」へ

『緑旗』誌に紹介される京城帝大生たちのキャンパス生活や率直な意見発表に刺激された李光洙は、小説によって「内鮮一体」を呼びかけようと、一九四〇年三月から『緑旗』に「心相觸れてこそ」、一九四一年一月から『新時代』に「그들의 사랑」を書いた。このころまでの李光洙からは、与えられた状況に自分なりのやり方で立ち

向かおうとしていることが感じられる。ところが、このあと戦時色が深まるにつれて、彼の姿勢は方向性を見失っていく。「緑旗」の雰囲気も急速に変わった。津田剛や森田芳夫など緑旗連盟のメンバーたちは国民総力朝鮮連盟に登用され、中表紙に掲げられていた「緑旗聯盟綱領」も四月から「皇国臣民の誓詞」に代わって「緑旗」は独自性を喪失する。「内鮮一体」は「新体制」という言葉に取って代われ、李光洙もこの激流にまきこまれていった。

九月に発表した「半島民衆の愛国運動」という論説で李光洙は、「受動的な被統治者意識を捨て、積極的に自身の皇民化と合わせて、国策に対する協力を決意したのが所謂転向」であったが、臨戦態勢に入った今では、「天皇帰一滅私奉公の新体制への転向」という「真正普遍なる転向」が必要であると叫んでいる。そして「内鮮一体」という標語も今は歴史的用語「⁽⁸⁵⁾」になったとして、「思想感情風俗習慣中に非日本的なものを除去して日本的なるものを代入醇化す」べきだと書いている。周囲の状況に対して真面目に取りくもうとする彼の積極性が最悪の形であらわれたものである。

一二月の「大東亜」戦争勃発は「内鮮一体」論議を完全に終焉させた。翌年新年号の座談会記事での「こうなつてくると内鮮一体という言葉が水くさいほどに思われますね⁽⁸⁶⁾」という辛島驍⁽⁸⁶⁾の発言がそれを象徴している。アムールのごとく状況にもなつて変化する「内鮮一体」は、いまや論じるまでもない自明の「完全同化論」へと変貌して朝鮮半島に君臨したのである。

終わりに

李光洙が同友会事件の前に書いた「萬爺の死」と後で書いた「心相觸れてこそ」の二つの日本語小説を、周囲の状況、同時期に書かれた朝鮮語小説、発表媒体の論調などを視野に入れて分析し、作品に内在する論理の変遷

をさぐってみた。

「萬爺の死」は、李光洙がその直前に書いた隨筆「成造記」に登場するある人物によつて創作意欲をかきたてられていたときに「改造」から依頼を受けて日本語で書いたものであり、いふなれば日本語で書いたことは「趣味」であった。とはいへ、その五年前には朝鮮人読者のために朝鮮語で書くことを言明していた李光洙が一流雑誌の依頼に応じて気軽に日本語で書いていることに、この時期の彼の精神的な弛緩と、その背後にある朝鮮社会の変質を見ることが出来る。

同友会事件によつて「転向」を余儀なくされた李光洙は、裁判所に提出した声明書の内容を誠実に実行しながら、「内鮮一体」という言葉を逆手にとつて朝鮮人差別を解消させようとした。そのために彼は日本人に向けて「内鮮一体」を訴える論説をいくつも書いた。「内鮮一体」に関する「緑旗」の率直な論調に刺激を受けた彼は、同じ目的を小説によつて達成するために京城帝大を舞台にした日本語小説「心相觸れてこそ」と朝鮮語小説「그들의 사랑」を書いて、小説による「内鮮一体」を企図した。しかし総督府は、朝鮮人から皇民化への内発性を引き出すためにこの言葉を利用してはすぎなかった。戦時色の深まりとともに雑誌「緑旗」の論調は変わり、「内鮮一体」という言葉も最初の柔軟さを失つて「完全同化」の意味に変わってしまう。そして李光洙もこの激流に呑みこまれていった。

朝鮮における徴兵制の実施を目指して総督府は「国語普及」を急ぎ、朝鮮語の領域はほとんどと狭められる。だが「心相觸れてこそ」を書いたあとの李光洙は、「世祖大王」(一九四〇)、「그들의 사랑」(春の歌)『(一九四一)』、「元曉大師」(一九四二)と、朝鮮語小説を書きつづけ、日本語小説を発表するのは一九四三年一月からである。なぜこの時期にあいついで日本語小説を書いたのか。そして、それらの日本語小説にはどのような意図がこめられ、何が表出することになったのか。これらの疑問の解明をつぎの課題としたい。

本稿は日本學術振興会から基盤研究(B)「朝鮮近代文学における日本語創作に関する総合的研究」(課題番号25284072)の科学研究費補助を受けた研究成果の一部である。

註

- (1) 李京瓚『李光洙의 親日文學研究』、太學社、一九九八／金允植『日帝末期韓國作家의 日本語 글쓰기』、서울대학교出版部、二〇〇三
- (2) 布袋敏博『日帝末期日本語小説研究』、서울대학교大学院國語國文學科修士論文、一九九六
- (3) 노상래は「日帝下二重語文學의 研究成果와 期待效果」(『語文學』第一〇二輯、二〇〇八)で日本語小説の研究史を整理し、この研究が朝鮮近代文学に与える成果を指摘し、권보삼래は「一九一〇年代의 二重語狀況과 文學言語」(『한국어문학연구 제54집』、二〇一〇)で日本語小説は朝鮮近代文学の起源に関わる問題であるとの画期的な視野を導入した。最近の作品研究としては김정미の「李光洙後半期文學의 民族담론의 양가성」(『語文學』第九七輯、二〇〇七)、노상래의「주음의 美的近代性에 대한 一考察」(『韓民族語文學』第五五輯、二〇〇九)、李承信の「李光洙의 二重語文學考察」(『帝國日本の 移動과 東아시아 植民地文學』、문、二〇一一)などがある。日本では任展慧氏の先
- (4) 註(2)論文で布袋は李光洙の日本語小説を同友会事件の裁判にむけての「デモンストレーション」だったとしている。
- (5) 白川豊は以前の論文で、李石薫の朝鮮語創作と日本語創作が別々に研究対象とされていることを批判して、「一人の作家の活動を總体的に見るには、日本語と朝鮮語の創作をすべて対象としなくてはならない」と述べた。李光洙研究についても同じことが言える。白川豊「李石薫(牧洋)作品考―資料整理を中心に―」(『朝鮮學報』第一六〇輯、一九九六、一三五頁)

- (6) 波田野節子「李光洙・『無情』の研究」、白帝社、二〇〇八、四〜一〇頁
- (7) 「主人圣차 그리운 二十年前의 京城」、『李光洙全集 14』、三申堂、一九六二、三三三頁。このなかで李光洙は、日本語の発音がハンクルで記されている弓場重栄の『日語独学』という本で独学したことを回想している。現在この本は国会図書館デジタルコレクションで見ることができ、<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/862075>
- (8) この学校はのちに光武学校になった。一進会の幹部が学校に来て学生たちに留学勧誘の演説をしたことを李光洙は前掲「主人圣차 그리운 二十年前의 京城」のなかで回想している。三二二〜三二四頁。李光洙が東京に来たのは、一九〇五年夏のことである。
- (9) 明治学院を卒業した年に仲間たちと出した雑誌『新韓自由鐘』で、李光洙は孤筆という号で友人のようなふりをして自らの経歴を語っている。波田野節子「『極秘新韓自由鐘』第三号の李光洙関連資料」『韓国近代作家たちの日本語』、白帝社、二〇一三、一三八〜一四〇頁
- (10) 『白金學報』一九号、一九〇九年二月
- (11) 『大韓興學報』一一号、一二号、一九一〇年三月、四月
- (12) 波田野節子「李光洙と『翻訳』―アंकルトムズ・ケビンを中心に―」、東京大学大学院研究紀要「韓国朝鮮文化研究」第一三号、二〇一四 参照
- (13) 「五道踏破旅行記」は『京城日報』に一九一七年六月三〇日から九月七日まで連載された。最近「毎日申報」と『京城日報』の二つの版本が최주한により整理されている。최주한「『국가지 관본의 오도담과 여행기』 자료 1 『毎日申報』版 五道踏破旅行·자료 2 『정성일보』판 오도담과 여행·자료 3 『京城日報』版 五道踏破旅行」、『근대서지』 제9호、二〇一四、一九九〜四三一頁。なお日本語版の復刻は下記に取められている。大村益夫・布袋敏博 編／解説「近代朝鮮文学日本語作品集一九〇一〜一九三八 評論随筆篇三」、緑蔭書房、二〇〇四
- (14) 一九二三年に在朝日本人の市山盛雄編で坂本書店から刊行された『朝鮮民謡の研究』に、李光洙の「朝鮮の民謡に現われた朝鮮民族の民族性」と崔南善の「朝鮮民謡の概観」が収められている。同書の「例言」によると、これらは市山が編輯していた月刊雑誌「真人」の特集号に掲載されたものである。李光洙はまた一九三二年六月に日本の雑誌「改造」に「朝鮮の文学」という論説を載せている。波田野節子「李光洙の日本語創作と日本文壇」『韓国近代文学研究―李光洙・洪命憲・金東仁―』、白帝社、二〇一三、七頁

- (15) 布袋は李光洙の日本語小説のリストに、一九三九年一月に『総動員』に掲載された「玉蜀黍」と一九四〇年五月一七日から二四日まで『京城日報』に連載された「山寺の人々」を入れているが(『日帝末期日本語小説研究』八八頁)、本稿ではこれらを随筆とみなして小説に入れていない。
- (16) 『三千里』一九三五年三月号には息子の死の一周忌を迎えた李光洙夫妻の手記が載っている。
- (17) 「春園出家放浪記 朝鮮日報副社長辭任内面斗 山水放浪の前後事情記」、「三千里」、一九三四年五月。李光洙は朝鮮日報副社長を辭職して放浪するという文書を新聞紙上で公表し、その後一時行方不明になった。
- (18) 許英肅が産院開業の地として孝子町を選んだことには、同じ時期に東京の日赤病院で研修していた朝鮮在住の産婆、高橋マサとの関係があったのではないかと推測される。岩手県出身の高橋マサは一九三二年に教員の夫とともに朝鮮に渡り、京城の孝子町で産婆業を営んだ。高橋一家と李光洙一家は、許英肅とマサの産科医と産婆という職業上のつながりを越えて、家族ぐるみで付き合ったという。筆者はマサの長男の高橋幹也氏(北上市在住)より二〇一四年一月一日に聞き取り調査をさせていただいた。(『春園研究学報』第6号(二〇一四・一二)に掲載予定) この
- 場をお借りして氏に感謝の念を申し上げる。なお氏は、池明鏡の依頼で韓国の雑誌『歴史批判』八号(一九八九号を)に李光洙の思い出「이광수 선생님을 생각하교」を寄せ、一九九〇年九月にご自身が出されている京城中学卒業生の同人雑誌『潮流』四号(文芸同人潮流社)にその日本語原文を載せている。(二〇〇七年一三号に再録)自宅の庭でどてらを着てくつろぐ李光洙の写真も載っている。筆者はこの写真の現物を高橋氏から頂戴し、二〇一四年三月にフィラデルフィアで開催されたAAS学会でお目にかかった李光洙の次女李廷華氏に贈呈した。
- (19) 一九四二年の『三千里』一月号に書いた「東京の思い出」のなかで、李光洙は、東京に初めて行ったのは一九〇五年夏、二度目は一九一五年の早稻田留学、三回目は一九二三年の「震災直後」、四回目が一九三五年で、「昭和十二」年のお正月を麻布梅田町の屋敷町寓居の二階で富士の姿を眺めながら迎へた」と書いている。波田野節子「李光洙の日本語創作と日本文壇」、「韓国近代文学研究」、一〇頁参照
- (20) 五月八日に山本の招きで藤森成吉や林芙美子とともに国技館で夏場所を見物した。前掲「李光洙の日本語創作と日本文壇」、一〇～一二頁
- (21) 金允植「이광수와 그의 시대」卷、一九九九、二六

三頁

- (22) この作品は『李光洙全集13』に収められている。『三千里』ではタイトルについていた(感想)の文字が全集でははずされ、ジャンルは「隨筆」になっている。だが、後半の人物描写には創作の要素が濃く。
- (23) 李光洙「成造記(感想)」、「三千里」、一九三六年一月、二四六頁／『李光洙全集13』、三四二頁。拙訳。以下、日本語訳は特に断らない限り波田野の訳である。
- (24) 李光洙はこの人物によほど強い印象を受けたようで、五年後に書いた長編「봄의 노래(春の歌)」の女性主人公トシコの父親にも彼の姿を投影させている。
- (25) 一九一〇年一月二日付「日記」、「朝鮮文壇」六号、一九二五／『李光洙全集19』、一八頁
- (26) この年の『新人文学』一月号に載った春城との座談会で、李光洙は、「張赫宙のような人は日本語で小説を書いています、東京で発表さえすれば立派だとか考えていませんから」と皮肉を言っている。「対談 李光洙氏との一問一答記」『新人文学』一九三六年一月号／『李光洙全集20』、三中堂、一九六三、二五三頁
- (27) 金允植「一九四〇年前後在ソウル日本人の文学活動」、「岩波講座近代日本と植民地7 文化のなかの植民地」、岩波書店、一九九三、二二六頁。ただしこれは若いころの崔
- 載瑞の日本語愛好について述べた言葉である。
- (28) 「萬爺の死」の文章は読点が異常に多くて読みにくいが、声に出して読むと意外に流暢であった。当時の日本文壇の他の作品と比べてどれほどのレベルなのか、筆者には判断がつかなかったため、日本近代文学研究者の五味淵典嗣氏(大妻女子大学)にお尋ねしたところ、当時はこのように読点が多い文体もあったし、さほど悪くない文章に思われるというご意見をいただいた。
- (29) 「余의 作家的態度」『東光』一九三一年四月／『李光洙全集16』、一九二頁
- (30) 註(26)「対談 李光洙氏와의 一問一答記」／『李光洙全集20』、二五三頁
- (31) 『東光』は一九二六年五月に創刊されて一九二七年九月に停刊し、一九三一年一月に再刊されて一九三三年一月に終刊した。
- (32) 金相泰「一九二〇～一九三〇年代同友会・興業倶楽部研究」、「韓国史論」二八、一九九二、二五二頁／河かおる「植民地期朝鮮における同友会」、「朝鮮史研究会論文集三六」、一九九八、一五三頁。氏はこれとは反対の警務局の見方も紹介している。
- (33) 徐椿「朝鮮に於ける愛國運動」『緑旗』一九三九年三月、三七頁。李光洙も「나의告白」「나의 毀節」の冒頭

で「満州事件は国内の民族運動戦線に大きな後退の契機をあたえた」と回想している。「李光洙全集13」二五四頁。朝鮮総督府警務局編纂、「最近に於ける朝鮮治安状況昭和八年」(巖南堂書店、一九七八年)、同上昭和十一年(不二出版、一九八六)の「治安状況 概説」には「民心次第に安定に向かいつつある」「漸次思想浄化の曙光を認めつつあり」などの文言が見え、三木治夫(森田芳夫の筆名)白川豊氏のご教示による)も「満州事変以後、朝鮮の思想界はぐんぐん変わった」と書いている。日本人の側から見てもこの時期に大きな変化があったことがわかる。三木治夫「内鮮一体・東亜共同体の問題」『東洋之光』、一九三九年五月、二三頁

(34) 註(32) 金相泰論文、二四九頁

(35) 「유정기(家を売る記)」「文章」一九三九年九月号／『靑庄記』『嘉美』、モダン日本社、昭和十五年、四一頁。

これは同友会事件をへて転向声明を出したあとに書かれたものだが、過去の記憶を修正をしているようには見えない。率直な述懐なのではないかと思われる。

(36) 「転向」という語はいろいろな意味を含んでいて使い方が難しいが、後述するように李光洙自身も「転向」という語を用いているので、本稿ではそれに従ってこの語を用いる。京城地方法院検事局が一九三七年から翌年にかけて

作成した「同友会関係報告」(韓国国会図書館マイクロフィルム「朝鮮人抗日運動調査記録」文書番号〇七四)でも、「思想転向会議」「思想転向文」など、李光洙の行動に対してこの語を使用している。

(37) 『나의 고백』、『李光洙全集13』、二五六頁

(38) 李光洙は一九一七年に「無情」と「開拓者」を「毎日申報」に連載して作家として脚光を浴びたが、その後は「東亜日報」と「朝鮮日報」に長編小説を連載して「毎日申報」には書かなかった。同友会事件で「恭愍王」が中断したあとは、長編小説を新聞連載はせず、書き下ろしで単行本として刊行した。だが一九四〇年に同新聞が廃業に追い込まれたあと、一九四二年に「元曉大師」を「毎日新報」と改称した同紙に連載し、奇しくも植民地時代最初と最後の長編小説をこの新聞に連載することになった。

(39) 朝鮮総督府警務局編「最近に於ける朝鮮治安状況(昭和十三年)」、巖南堂出版、一九七八、三八七頁

(40) 起訴を免れた会員たちのうち、田榮澤と金興済をはじめとする一七名は、六月に転向声明をだして大東民友会に入会している。「朝鮮人抗日運動調査記録」同友会関係文書「MF06033-074京高特秘大一一八四號昭和十三年六月一四日」同友会事件関係者の転向声明書発表に関する件」

(41) 同上 受理日十一月七日京畿道警察部報告「同友会事

件保釈出所者の思想転向会議開催に関する件」次に引用する「申合」もこの中に入っている。／「朝鮮治安状況(昭和十三年)」、七三〜七四頁／「毎日新報」、一九三八年一月四日付記事「李光洙氏等三十三人臣民의 赤誠披瀝神社参拝、賽銭奉納」

(42) ここから始まる一段落と最後の箇条書き一の部分で、同友会事件の担当検事だった長崎祐三は「緑旗」一九三九年八月号に発表した論説「時局の転向者の将来」の中で引用している。

(43) 註(40) の金興済らの転向声明もその骨子はまったく同じである。同じ担当者の長崎祐三検事が誘導して書かせたものだからだろう。

(44) 李光洙は『나의 고백』のなかでは「申合」と「時局有志円卓会議」については言及せず、このあと四月に出版社が中心になって行った「皇軍慰問文壇使節」壮行会に出席したことを「これが私がいわゆる対日協力に手をそめた始めであった(이것이 내가 이른바 일본에 협력하는 일에 참여한 시초였다)」と書いている。「李光洙全集13」二六三頁

(45) 註(41) の記事「李光洙氏等三十三人臣民의 赤誠披瀝神社参拝、賽銭奉納」

(46) 鄭順貞「朝鮮文人オンパレード」、『京城日報』、一九

三三年五月六日。朝鮮の現代作家たちを紹介するこのコラムで、筆者は、李光洙は小説よりもむしろ彼の思想そのものによって読者を獲得している作家であり、彼の現在の思想は時代遅れだが、往年の自由恋愛思想に刻印された人々によって「先人的好意」を以て寓せられる特別な作家だとしてい

(47) 註(17) の「三千里」の記事「春園出家放浪記 朝鮮日報副社長辞任内面斗 山水放浪의 前後事情記」に見える「全朝鮮数万の春園宗愛読者」という文句は、註(46) のコラムの内容と同じく、当時の人々に対して李光洙が持っていた影響力の大きさを示唆する。

(48) 『三千里』一九三九年新年号「時局有志円卓会議」、四三頁

(49) 『명사교육도시리즈어현대사를 위하여은사람들의 이야기』、中央出版印刷、一九七七、一七〜一八頁。崔鍾庫「李光洙의 京城帝大入学과 最近断想」、春園研究学会誌「스레터」第八号、二〇二二、一五頁から再引用

(50) 『三千里』一九三九年一月号、四四頁

(51) 『三千里』一九三八年八月号「機密室」欄「朝鮮語排斥不可 南総督이迷妄者에 一針」

(52) 「内鮮一体論の基本理念」は一九三九年一月に「今日の朝鮮問題講座」第一巻として緑旗連盟から刊行された。

- (53) 「東亞共同体の建設と内鮮一体の完成」、「緑旗」、一九三九年一月号、一一頁。このほかにも評論家印貞植の「内鮮一体方言語」(「三千里」一九三九年一月)や「内鮮一体の文化理念」(「人文評論」一九四〇年一月)をはじめ、こうした主張は多かった。
- (54) 宮田節子「朝鮮民衆と皇民化政策」IV「内鮮一体」の構造、未來社、一九八五、一四八頁
- (55) 三ツ井崇「揺らぐ「内鮮一体論」像—日中戦争と朝鮮植民地支配」『現代中国研究』中国現代史研究会、二〇一三年一月、五三頁
- (56) 同上、四五頁
- (57) 波田野節子「李光洙の第二次留学時代」『韓国近代作家たちの日本語』白帝社、二〇一三、四三頁
- (58) 人が見えていない場所で国旗に敬礼していた李光洙の話が伝わっているが(出処不明)、李光洙にとってこれは「日常行動の訓練」だったのだろう。
- (59) 「國語を解する朝鮮人表(昭和十一年末)」、京城日報社編纂「昭和一四年度朝鮮年鑑」、高麗書林、一九九二、八八七頁。「日本語普及」を扱った以下の論文所載の一九四〇年の「朝鮮總督府施政年報」によれば、朝鮮人の「稍解シ得ルモノ」「普通会話ニ差支ナキモノ」の率は一割四分のことだが、これは論説を理解できるレベルでない。

- 井上薫「日本統治下末期の朝鮮における日本語普及・強制政策…徴兵制度導入に至るまでの日本語常用・全解運動への動員」『北海道大学教育学部紀要』第七三号、一九九七、一二九頁／三ツ井崇「朝鮮植民地支配と言語」、明石書店、二〇一〇、五〇／五六頁／三ツ井崇「日中戦争期以降における朝鮮總督府の言語政策と朝鮮社会…日本語「普及」問題を中心に」『翰林日本学』第三三輯、二〇一三、四四頁
- (60) 金史良の「天馬」は一九四〇年六月の「文藝春秋」に発表された。これは「天馬」第二章にある評論家李明植の言葉である。二パーセントという数は低すぎるように思われようが、作家の体感には信憑性がある。「日本語ができる」ことと日本語で小説を読めることは、まったくレベルが違う。金史良は他の場所で「朝鮮の人の殆んどが読めない内地語で書くとすれば、それこそ笛吹けど人は踊らずといふことにならう」と書いている。「朝鮮文学と言語問題」、『三千里』、一九四一年六月
- (61) 一九四一年二月「協和事業」三一(未見)。これは五月に中央協和会から同じタイトルの小冊子として刊行されて配布された。
- (62) 一九四一年一月二日〜二日『京城日報』
- (63) 一九四〇年一月一日〜九日まで、七日をのぞいて全八回で連載された。この論説は単行本「同胞に寄す」の冒

頭に取められている。なお当時どれくらい在朝日本人と朝鮮人が『京城日報』を読んでいたのかを知りたいと思っただが、発行部数、購読者内訳ともにはつきりしない。永島広紀氏によれば、一九三九年末現在の購読者数は「内地人39,093、朝鮮人15,795」(『昭和十四年中に於ける朝鮮出版警察概要』という記録があり、「一九四二、三年ころには二〇万代にのった」(崔竣「韓国新聞史」三〇五頁)、あるいは「発行部数四二万ばかりあったのが、戦後は一〇万ばかりに激減」(横溝光輝氏談話速記録(下))「内政史研究会、一九七三年」という証言があるという。一九四〇年八月に朝鮮語新聞が廃刊になったあとは、朝鮮人も日本語を読める者は『京城日報』を読んだであろうから、発行数は急激に伸びたはずである(この場を借りて永島氏のご協力に感謝の意を表す)。註(18)で紹介した高橋幹也氏は一九四〇年代の京城中学と京城医専に在学したが、「日本人はみんな『京城日報』を読んでいたら」と語っている。

- (64) 宣撫工作の本来の意味は、占領地において占領軍の方針を住民に周知せしめることで人心の安定を図る工作であり、敵将を説得する行為はこれから外れている。
- (65) 李京頃は、盲目の新郎と結婚して異国の牢獄に閉じ込められた朝鮮人新婦石蘭の運命に「親日文学を規定する一

李光洙の日本語小説と同友会事件(波田野節子)

つの象徴」を見ている。『이광수의 친일문학연구』、二八五頁

(66) ここで小説が終わってもさほど違和感はない。「緑旗」ではほかにも、一九三九年一〇月号に掲載された李容九の息子李碩圭の「内鮮一体の先駆者 父 李容九を語る」(上)が、一二月号の(中)の末尾に(以下次号)とあるにもかかわらず、そのあと(下)の掲載がなく、内容的には(中)で終わっておかしくないため、中断なのか終了なのかの判断が難しいという例がある。一九四一年三月号から連載が始まった宮原徳一(金聖珉)の「天上物語」は一〇月号の第五回で中断しているが、この場合は内容から見て明らかに中断であり、その後、体調不良のためという本人の陳謝が掲載されている。

(67) 以下、「緑旗」については主に永島広紀「戦時期朝鮮における「新体制」と京城帝国大学」(ゆまに書房、二〇一一)の第一章「昭和前期の朝鮮における「右派」学生運動論—京城帝大予科立正会・緑旗聯盟の設立過程をめぐる基礎的考察」を参考にした。他の資料も挙げておく。永島広紀「(緑旗)とその時代—影印復刻版「緑旗」興亜文化」誌の解題に代えて、「緑旗」別巻索引(記事・人名)、オークラ情報サービス、二〇〇九/高崎宗司「朝鮮の親日派—緑旗連盟で活動した朝鮮人たち」、岩波講座「近代

日本と植民地6抵抗と屈從」、一九九三／鄭惠瓊・李承燮「日帝下綠旗聯盟의 活動」、韓國近現代史研究「第一〇輯、一九九九／朴成鎮、「日帝末期綠旗聯盟의 内鮮一體論」、同上

(68) 「綠旗聯盟の運動を語る」『綠旗』一九四〇年一〇月号、一二〇頁

(69) 同上、一一九頁、「綠旗聯盟の運動は、津田剛先生と森田芳夫先生が京城帝大を出て、専門につとめるやうになつた所から第一歩をふみだしたと言へるでせう」。津田剛は法文学部哲学科、森田芳夫は法文学部史学科を、ともに一九三二年に卒業している。永島広紀『戦時期朝鮮における「新体制」と京城帝國大学』、四九頁、五〇頁。

(70) 玄永燮は京城帝大を津田たちの前年に卒業しているが、予科は彼らと同じく文化Bの三回生だった。玄永燮の経歴については註(67)の永島広紀著書の五三頁と、高崎宗司論文の二一九―二三五頁を参照にした。なお布袋敏博は、津田剛と玄永燮と寺本喜一が予科時代に京城帝大の文芸部の雑誌「清涼」に、崔載瑞や兪鎮午とともに作品を載せていたことを明らかにしている。前掲「日帝末期日本語小説研究」四〇頁

(71) 玄永燮「綠旗連盟の朝鮮に於ける役割」『綠旗』一九三八年二月号、二二頁

(72) 津田剛「内鮮一體論の基本理念」、綠旗聯盟、一九三九年八月号。ただし、こうした論調の

一方で、「歴史的發達段階を異にする者が平等の地位に立つということとは実は却つて不平等である」(京城帝大助教・森谷克巳「東亞共同体の理念と内鮮一體」『綠旗』一九三九年八月号)のような、日本人側の本音をのぞかせるような意見も散見される。また、津田栄は「内鮮一體と言葉の問題」(『綠旗』一九三八年三月号)で、国家が統制ある活動をするためには、「一つのきまつた国語」を使う必要があり、方言はなくすよう努めねばならないと書いているが、これは津田剛が書いた「朝鮮服は純乎たる日本服である」(註52参照)の論調とはあきらかに違っている。

(74) 「綠旗」一九三九年一〇月号

(75) 玉城仁「國語常用について内鮮の學生に望む」『綠旗』一九三九年五月号

(76) 崔鍾庫「이광수의 경성제대 입학과 최근 단상」『춘원연구학회 뉴스레터』第八号、二〇―二二。李光洙は京城帝大の在学番号一として登録されている。

(77) 이영근「이런 일 저런 일」、이정화「그리운 아버지님春園」、우신사、一九九三、二〇七頁

(78) 「綠旗」一九三九年七月号、二三頁。「たとえば、文芸

作品なら、内鮮一體の正しき理念の内容のものを、高い芸術的手法に於いて創作して、これを文学として高い水準へ引き上げると共に、それを読む民衆をして愛読の中にその内容に対する感激と共感を持たせるように努めることが必要である」

(79) 「그들의 사랑」『新時代』第三卷、一九四一、三〇〇頁

(80) 次號를 기다리시라。

(81) 김경미, 註3) 論文、一九九頁

(82) 第一回と第三回には本文のあとに「乞御期待」に該当する文章がついているが、第二回だけにはないことも削除の事実を傍証する。

(83) 玄永燮「朝鮮人の進むべき道」綠旗聯盟、一九三八年、一八八頁。これは一九三七年の「綠旗」八月号に掲載された「眞の日本を知る迄―個人より国家へ―」を、副題を「私

の小さな体験」と変えて単行本に付録として入れたものである。「綠旗」掲載時には李光洙は同友会事件で取監されていたから、読んだのは単行本のほうだと思われる。

(84) 永島広紀「戦時期朝鮮における「新体制」と京城帝國大学」第二章「戦時下の朝鮮における新体制運動と「文化」問題」四、國民総力朝鮮連盟「宣伝部」「文化部」と綠旗連盟、八二―八三頁

(85) 一九四一年九月二八日付「東亞新聞」。大村・布袋「朝鮮文学関係日本語文献目録」に記載されているが原本は未見。筆者は、上海で出されていた雑誌「光化」の同年一二月号に再録された記事によって内容を知ることができた。本資料を提供してくれた福岡大学の熊木勉氏にこの場を借りて感謝の意を表す。

(86) 「綠旗」一九四二年一月号「掃還兵士と文人 座談会」

(新潟県立大学名誉教授)